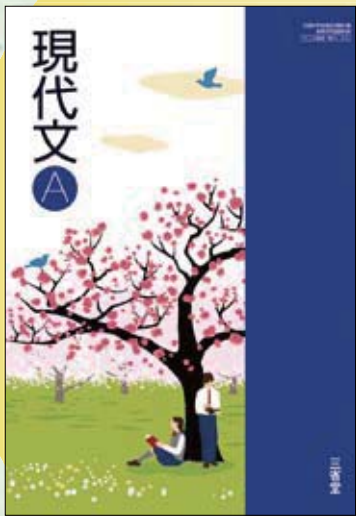


高校国語教育

2014年(夏)号

三省堂



◆ 特集

『現代文A・古典A』

教材としての小林秀雄

センター試験「国語」の傾向と対策

高校国語教育

2014
年夏号

目次

巻頭エッセイ 三浦しをん……………1

現代文A

『現代文A』の特徴 齋藤祐……………2

〈コラム〉『現代文A』学習の手引きの工夫 宮岡良成……………4

〈コラム〉就職、AO・推薦試験に向けて 森下治生……………5

古典A

三省堂『古典A』——古典に親しむ態度を育てる 三浦和尙……………6

〈コラム〉現代に生かす力を養う漢文 太田亨……………9

教材として的小林秀雄 何を読むかどう読むか

日常の水際で、小林秀雄を読む——引用でつづる教材研究余話——岩崎昇……………10

「姿」について 柳宣宏……………12

小林秀雄教材の今日的意義 高野光男……………13

センター試験「国語」の傾向と対策 安藤延明……………14

「窓」としての国語の教科書

三浦しをん

国語の教科書は、未知の作家と出会える「窓」のよ
うな存在だった。新学年を迎え、真新しい教科書を受
け取ると、載っている小説や詩をすぐに読んだ。つるつ
としたページの感触とともに、そのときの胸躍る気持
ちをよく覚えていた。数学や物理の教科書は、ついに
一度も開かずじまいのページが多々あったが（理解が
追いつかず、授業中にボーンとしていたから）、国語
に限っては授業がはじまるのを待ちきれず、どんどん
「窓」を開けてたくてたまらなかった。

高校の教科書に載っていた作品で印象深いのは、中
島敦の『山月記』だ。漢語が多く、取っつきにくいと
も思ったが、文章が宿す独特の肌触りが魅力的で、繰
り返し読んだ。あまりにも気に入ったので、ここだけ
の話、自室で情感たっぷりに音読までしてしまった。

ひとが虎になって、しかもしゃべるなんて、妙な話
だ。でも、寓話というには生々しいし、傲慢と高すぎ
る自尊心を戒める教訓話にしては切実さが漂っている。
なんというか、さびしい物語だと感じた。

この小説を書いた中島敦とは、どんなひとなのか。
学校図書館で全集を読んでみた。ほかの作品も総じて
妙で、しかし硬質で透きとおった輝きを放っていた。
それは、ひとの心の奥底にあるさびしさが放つ輝き
だった。

私にとって中島敦は、大好きな作家の一人となった。
書棚の目立つ場所に文庫版の全集を置き、いまま折節
読み返している。教科書という「窓」のおかげで、高
校生のときに中島敦の作品と出会ったことができ、とて
も幸運だった。

本を読めと無理に勧めても、読書が好きではないひ
とには苦痛にしかならない。書物は万能薬ではないし、
即効性もないのだ。けれど、悩みや迷いを抱えたと
き、孤独に耐えきれなくなりそうとき、寄り添って
くれる頼もしい友となる可能性を秘めている。「そう
だ、本がある」といつか思い出すきっかけになるよう
な、他者と通じる「窓」。国語の教科書とは、そうい
う存在なのだと思う。

（みうらしをん・作家）

『現代文A』の特徴

齋藤 祐



『現代文A』の編集コンセプト

今回の『現代文A』教科書は、次のようなコンセプトに従って編集を行った。

1 全五章の構成と短文教材の選定

『現代文A』では、年間を通じた学習課程を五つに分け、「現代の文化を読む1〜4」「近代の小説を読む」とした。これにより、それぞれを独立した大きな単元として扱うことが可能となり、三学期制を敷いている学校の場合、五つの学習課程を、一学期中間・一学期期末・二学期中間・二学期期末・三学期期末へと切れ目なく対応させることができる。また、

章の内容は、第一章を随想、第二章・第五章を小説、第三章・第四章を評論（第四章には導入として随想あり）というように、教材の種別を勘案して配置してある。結果、二期制を敷いている学校においても時期ごとの教材選択がスムーズに行われ、柔軟な対応が可能となるだろう。収録教材文の新旧バランスについても、近代から現代に至るまでを万遍なくとることができるよう配慮した。小説については、「夢十夜」（夏目漱石）や「山月記」（中島敦）といった重厚な近代文学を最終章に据えた上で、「アマガエル」（太田光）、「旅する本」（角田光代）など、高校生にとって身近な現代の作家を配置してある。また、随想・評論の分野につ

いては、「求めるものに応えてくれる」（三浦しをん）、「最初のペンギン」（茂木健一郎）、「境目」（川上弘美）など、同年代的に活躍する作家・評論家の文章から、「眼差しを交わす喜び」（高畑勲）、「絶え間のない流れの中にある生命」（福岡伸一）を経て、「モード化する社会」（鷲田清一）、「人はなぜ働くのか」（姜尚中）といった現在進行形の問題意識を啓発できるものへつながるラインナップとなっている。

なお、『現代文A』の標準単位時間が二単位であることを考慮し、採録教材文はできる限り簡潔にまとめたものを選んだ。最も短いものは、冒頭の随想教材、「求めるものに応えてくれる」の九六五字であるが、これを含めた随想教材の平均文字数は約一七〇〇字（編集部調べ。以下同様）となっており、これは、四〇〇字詰め原稿用紙に換算すると、四枚強の分量にすぎない。同じく評論教材は平均文字数が約二六〇〇字程度となっており、こちらも原稿用紙六〜七枚程度であるため、教室で非常に扱いやすいサイズであろう。

小説教材については、最も短い「アマガエル」の一三五一字から、比較的長文

の「旅する本」の五七九六字、「山月記」の六七〇六字まで取り揃えてあるが、平均すれば約四〇〇〇字程度であり、教室で読解するには質・量ともに十分なものとなっている。このように、各教材を短文化することによって、各単元を効率的かつ多様に学習することができるはずである。

加えて、本教科書は本文教材から「ウオーミングアップ」「日本語エクササイズ」などすべてを合わせて、二十九本の教材を六十六単位時間で学習できるように構成してある。この二十九本の半数以上にあたる十五教材について、一単位時間で学習できるものとした。この点についても、教育現場での活用可能性を踏まえたものとなっている。

2 学びのリズムと発展を重視

『現代文A』における学習リズムを生徒が把握し、かつ、学びのプロセスがスパイラルに発展するよう、各章に「ウオーミングアップ」「表現プラザ」「日本語エクササイズ」「文学の名作」の項目を設けた。以下、それぞれの項目について解説する。

(1) 「ウオーミングアップ」

「ウオーミングアップ」では、新聞のコラムを視写する活動を設けた。掲載ページには、見本となる本文と原稿用紙を配置し、そのまま生徒が書き込める形になっている。また、見本の一行あたりの文字数と、その下にあらかじめ用意した原稿用紙の一行あたりの文字数を同じにしてあるため、生徒は書き損じや改行ミスなどにすぐ気がつくことができる。

教員も、生徒が書いた各行頭および最終行を確認することで、生徒の到達度を容易に測ることができる。見(視)て写す「視写」は、国語学習の基本中の基本である。この活動を通じて、丁寧に書き綴る集中力を涵養するとともに、文章表記におけるルールの把握や、手本となる文章を正確に読み取る注意力の育成に資するものと期待される。

(2) 「表現プラザ」

「表現プラザ」では、物語の創作、広告文や自分語りのエッセイの作成という課題を設けた。一枚の絵画や写真、エッセイなどをきっかけとして、文章を組み立てることが容易となるようにしている。

(3) 「日本語エクササイズ」

「日本語エクササイズ」では、対義語

や類義語、四字熟語や敬語について、読む(書く)ために必要な日本語の基本要素をまとめ、さらにわかりやすい文章を作るための工夫についても整理した。

(4) 「文学の名作」

「文学の名作」は、明治から昭和中期までの散文・韻文の中から、ぜひ生徒に味わってもらいたいものを抽出し、その象徴的な場面や一節を掲載した。巻末の「資料編」にある「近現代文学史」と合わせて全体を通読することで、日本語の書き言葉が近代から現代にかけてどのように成立し、洗練されてきたのかをとらえることができる。

3 学習の手引き(学びの道しるべ)

詳細については次項に譲るが、従来の読解補助となる設問をより丁寧に展開し、できるかぎりスモール・ステップとできるよう工夫してある。また、生徒が解答を直接書き込むこともできるよう、各問いのあとには十分な余白を設けた。これによって、実際の教室における授業進度の把握や調整の一助となるだろう。

(さいとうゆう・中央大学杉並高等学校)

『現代文A』学習の手引きの工夫 宮岡良成

「学びの道しるべ」にはさまざまな工夫を凝らしている。いずれも文章読解が苦手な生徒を意識した構成となっている。

1 スペースの確保

ふつうは一ページに課題をまとめているのに対し、二ページ分を確保し、全体的に余裕を持たせた。これは生徒による書き込みができることを想定している。もちろん完全な解答を書くためのスペースはない。そのため中途半端なスペースはむしろ逆効果という考え方もあるかもしれないが、生徒の学習意欲をおこさせ、少しでも前向きに学習することを期待したものである。解答に結びつく単語だけでもよいし、不完全な一文でもよい。あるいは、理解できたか、できなかったか、自分自身のための覚え書きでもよい。各自が自由にこのスペースを使えるようにしたものである。

2 スモールステップ

課題は各教材につき五〜六問を用意した。比較的やさしいもの、読解の基本となるもの、文章を読み解ききつかけとなるものを初めのほうで設定し、全体に関わるものや最終的に到達すべきもの、あるいは教室全体でいろいろ話し合うものなどを終わりのほうに設定することで、課題を順に整理していくことによってスムーズに文章読解ができるようになっていく。また「山月記」では最初に音読を設定した。文章の流

れを体で味わうことで、漢語が多用される冒頭部分で生徒が挫折することを防ぐためである。本文にルビをふり、家庭学習でも音読ができるようになっていく。

3 ヒントマーク

課題にヒントをつけた教材もある。生徒が自分で解こうとしたときに、一人で考えてもどうしてよいかわからないこともある。そこで、自分で解くときの手助けにヒントを入れることにした。キーワードや対立概念、筆者が取りあげている具体例に注目させることによって、課題の理解に結びつけることを意図している。

4 学びを広げる

「学びを広げる」は、発展学習を意図して、教材本文を理解したうえで自己や社会について考える課題である。抽象度が高い評論教材は難しいイメージが強く、文章の内容をふまえて社会を考えたり、自分の意見をまとめたりするという学習にはなかなか結びつかない。そこで、例えば「モード化する社会」では生徒たちにとって身近な「コマーシャル」に注目させ、巷にあふれている「コマーシャル」をとおして筆者が指摘する「物語」について考えさせる課題を設定している。

5 語句と漢字

「語句」と「漢字」は学習の基本である。「語句」は辞書で意味や用法を調べる習慣をつけさせたい。「漢字」は必ず覚えてほしいものをピックアップしている。文章の理解につながるのはいまでもないが、生徒が語彙を広げることに必要なので、適宜活用してほしい。

就職、AO・推薦試験に向けて

森下治生

学校では、この教科書が使い始められる頃にはもう、就職試験対策、AO・推薦試験対策などの取り組みが始められていることであろう。高校国語教師にとって頭の痛い季節の始まりである。就職だけでなく、大学・専門学校の入試がAO入試を始め、多様化・早期化している現在、受験指導は多忙を極める。

「先生、志望動機、書いたんだけど見てくれないかな」

「先生、面接の仕方が分からないんだけど……」

全ての生徒に一人一人丁寧に対応してあげたいとは思っても、物理的に困難なのは明らかだ。

そんな迷いや不安を抱えた三年生たちに、国語の授業の中で、いったい何ができるだろうか。いや何をすべきなのか。

1 資料編 表現の実践「志望動機・自己PRを書く」「面接を受ける」の活用

巻末の〈資料編〉では、実際に入社・入学試験を受けるための「小論文」や「志望動機」「自己PR」の書き方、「面接」の方法が具体的に説明され、一斉授業の中での授業方法が提案されている。これは単なる受験メソッドではない。社会に出るにしても、入学試験を受けるにしても、生徒は確固とした明確な意志をもっていることは少ない。むしろ、「志望動機」や「自己PR」を明文化させようという作業の中で、自分を

発見、というよりも創りあげて行くのである。何か志望のきっかけとなるものはなかったか（過去の自分）。そのために今何ができているか（現在の自分）。そのことによって何を学び、どのように社会に貢献していこうとしているのか（未来の自分）。この、過去―現在―未来という一貫した軸を意識化することによって、生徒は初めて自己の志望を明確化することができる。あるいはそれをまとめる過程で、現在の自分に欠落しているものが何であり、何をなすべきかを理解する。

人は、まず目的を定めてから行動に移るより、むしろ行動のプロセスの中で、目的を明確化していくということのほうが多いのではないか。志望先を決定してから志望動機を書き、面接の練習をするよりも、もっと早い段階から仮想の受験先を想定して準備に入るほうが、志望先の明確化と、それを通した目標の確立に結びつくだろう。〈資料編〉の作業は、受験準備というだけでなく、自己創造のプロセスなのだ。

2 その他の教材群との関連

また、文章を書くことに習熟していない生徒は、「ウォーミングアップ」の書写で文章を書くことに慣れるとよいだろう。また、評論「人はなぜ働くのか」では「働く」ことの意味がダイレクトに問われる。小説では太田光、角田光代といった若い作家の作品を中心に、定番の「山月記」などを通して「生きる」ことの意味が深く追究される。多彩な教材の読解が〈資料編〉での自己発見・創造と結びつくことで、生徒にとっては学校での「国語」の最後になるであろうこの『現代文A』の授業が、将来へと向けた確実な一歩となってくれることを願う。

（もりしたはるお・元東京都立文京高等学校）

《コラム》

三省堂『古典A』

— 古典に親しむ態度を育てる

三浦和尚



はじめに

このたびの学習指導要領の改訂に伴い、新しい教科書『古典A』が編纂され、二七年度から全国の生徒たちに届けられることになった。本稿では新しい科目「古典A」に期待される内容を考察するとともに、それに対応する教科書としての三省堂『古典A』について紹介することとする。

一 育てるべき力

新しい学習指導要領においては、旧来の「言語事項」が拡大され、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と

された。それに伴い、小学校においていわゆる「古典」が学習内容となったことは周知のとおりである。

このことが、高等学校の古典学習に一定の変化をもたらすことは想像に難くないが、実体としては当面、そういった変化というよりも、「古典A」「古典B」と科目区分されていることからわかるように、どのような生徒にどのような古典学習を保証するのかということの吟味のほうが課題としては大きいであろう。それは、実は古典学習は私たち教師が期待するほどは生徒たちに受け入れられてはいない、という現実があるからである。古典学習指導においては、「育てるべき古典の力を、「自力で古典を読む力」と

考えるのか、「生涯にわたって古典に親しむ態度」と考えるのか、二つのベクトルが考えられるように思われる。無言の自力で古典を読む力」の育成の先にあるいはそれに並行して、「生涯にわたって古典に親しむ態度」が育成されるのであれば、いうまでもなくそれは最もまっとうな教育である。最終的にベクトルは一致する。しかし、それが必ずしもうまくいっていない状況が現実ではないか。「古典を読む力」を育てようとして、そのことを性急に進め、結果的に「古典嫌い」「古典離れ」を生じさせている傾向は否定しがたい。

考えてみれば、「古典A」の学習の趣旨においては、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成を先行させることが必要なのではないか。

私自身は、古典学習の意義を、
・ 日本語の歴史をとらえる。
・ 日本の文化や精神の歴史をとらえる。
・ 「文学」として味わい、言葉や人間についての理解を深める。

といった点において考えているが、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成を考えた場合、「日本語の歴史」というよりも「文学としての味わい(面白さ)」

を先行させる必要があるように思われる。そういう意味では、語釈や文法を扱いつつ、いわゆる現代語訳ができたところでは、ほぼ学習が完結しているという授業ではなく、現代語訳を用いても内容を深めていく発問・課題や活動に支えられる授業が求められているのだといえる。

二 学習指導要領における位置づけ

これまで述べた点を、もう少し詳しく学習指導要領の側面から見てみよう。

いうまでもなく『古典A』は、『現代文A』と対になった教科書で、基本的には二単位のものであり、旧来の『古典講読』を精神として継承した教科書である。

いささか煩雑になるが、新しい「古典A」の性格を明確にするために、これまでの「古典講読」と新しい「古典B」との違いを、学習指導要領に示す目標から見てみよう。

○「古典講読」の目標

古典としての古文と漢文を読むこと
よって、我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

○「古典A」の目標

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことよって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

○「古典B」の目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることよって人生を豊かにする態度を育てる。

このように比べてみると、「古典講読」を「古典A」が受け継いでいることがよくわかる。そしてその主眼は、「古典B」の「古典としての古文と漢文を読む能力を養う」ではなく、「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読む」であり、「生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ところにあることがよくわかる。「古典B」が「伝統的な言語文化」というよりも「読むこと」に力が置かれるのに対して、「古典A」は「読むこと」よりも「伝統的な言語文化に親しむ」ことに重きが置かれるという説明がなされているのも、同様の趣旨である。

さらに言えば、「古典講読」にはない

「古典に関連する文章」が入ることよって、「古典A」は、「古典講読」でいわれた言語活動の取り入れや現代語訳の活用をさらに進める性格のものだと言える。内容の取扱(3)イで記される「教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」は、まさにその方向性の文言であろう。

三省堂の『古典A』は、こういった国語学習の在り方の具現化を求めて編纂された教科書である。

三 新しい三省堂『古典A』

新しい三省堂『古典A』は、これまで述べたように新しい学習指導要領の趣旨を生かすとともに、「生涯にわたって古典に親しむ態度」の育成の具現化を図ることのできる教科書である。

「古文」の領域にスポットを当ててみると、三省堂『古典A』は次のような特色を持っている教科書であると説明できる。

○親しみやすい題材

古文教材はすべて説話を取りあげた。

説話だから親しみやすいと短絡的に語るつもりはないが、説話は基本的にその範囲で完結しやすい短い物語である。また、説話として今日まで伝えられたことは、そこに文学としての価値、人間としての価値があると長い歴史が証明してきたものでもある。生徒は、いつ、どこで、誰が、どうしたといった物語の骨格を理解しつつ、その面白さを味わうことができる。そしてそれは、長い物語の一部のような、前後の脈絡や、複雑な人間関係の理解を前提としなくても読めるという点で、生徒の負担感が減ぜられるものである。生徒たちは、短く、最小限の前提となる知識しか必要としない説話のそれぞれの面白さに、ストリートに入っていくことができるであろう。古文への親しみを生み出す第一歩は、そういう点にあるのではないか。

○過不足のない傍訳

生徒の学習負担を考慮し、適宜傍訳を付した。それは、物語の内容にできるだけ早く入っていくことを可能にするためである。

一方で、現代語訳という形はあえて避けた。これはいうまでもなく、原文を尊重し、原文を繰り返し読み返し音読し、原文によ

りながら解釈していくことを大切にするためにである。両者を共に満たすために、傍訳の量には慎重な検討がなされている。

○読みを深め、学びの定着を図る「学習の手引き」

「学習の手引き」は「課題」と「演習」で構成されている。「課題」は、語釈や文法にかかる内容はなるべく避け、本文の内容の探究そのものの課題を精選した。また「課題」は、「読みの着眼点」でもあり、その意味では「読み方」を示すものになっている。さらに「演習」は、その教材の中から特徴的な文法事項等を取り出し、確認する内容となっている。この問題にしたがって生徒たちが学ぶことによって、重要な文法事項の定着を図ることができる。

○古典文学の世界を広げるコラム

古典文学の世界への興味・関心を高めるために、また、発展的な学びの入り口になるように、適宜教材に関連するコラムを置いた。その内容は例えば次の通りである。

・芥川龍之介と説話

『宇治拾遺物語』の「絵仏師の執心（絵仏師良秀、家の焼くるを見て喜ぶこと）」に合わせ、芥川龍之介の「地

獄変」を紹介している。芥川にとつての古典作品の意味が述べられるとともに、「両者を読み比べてみよう」という課題が付されている。

・説話と中国の文章

『宇治拾遺物語』の「後の千金（のこと）」は、『莊子』の一節を原典とした説話である。中国の書物がこうした形で日本で受け止められてきたことを紹介している。

・古典の中の「同じ話」

『今昔物語集』の「姨母捨山（信濃の国の姨母棄山のこと）」の話は、『大和物語』や『俊頼髓脳』などにも同じような話として採られている。ここでは『俊頼髓脳』と比べ、両者の作品の性格の違い（文種）に言及している。

以上のように、三省堂『古典A』は、学習指導要領の「目標」に掲げられる「我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」ことを、生徒の立場、生徒の目線に立って真に具現化する教科書である。

広く生徒の学びに供されることを願ってやまない。

（みうらかずなお・愛媛大学）

現代に生かす力を養う漢文

太田亨

漢文は日本の言葉と文字に多大な影響を与えながら、その作品は長い歴史を通じて読み継がれ、「日本の古典」として重視されています。しかし、敬して遠ざけられつつあるのが現状です。こうした中、伝統的な言語文化に重きを置き、古典としての漢文に親しむことが望まれています。高校生が少しでも漢文に振り向き、古人のものの考え方の見方を楽しんでほしいとの思いで教材は選ばれています。

故事成語では「塞翁が馬」「朝三暮四」「杞憂」を取りあげています。これらの熟語は現在でも日常的に使われます。二千年以上も前に成立した熟語が今もって使われるのはなぜでしょうか。言葉の背後に潜む人間が生きる上での大切な智慧を味わって下さい。その智慧こそが長く生き続けてきた理由であり、今日も我々が共感しうる源泉なのです。

思想では、『論語』より孔子の生き方について述べられた章を、『老子』『莊子』よりその特徴を示す章を取りあげています。漢文の授業で、とかく孔子を神聖化する傾向がありますが、孔子も人間です。理想の政治を追い求めながらも、それらは叶うことなく、多くの挫折を味わいました。よく知られた章ですので、人間くさい孔子を味わってください。孔子の思想と対をなす老荘思想の教材は、物事を考える時には決して一方向からでなく、あらゆる角度から見

ることの大切さを教えてくれるはずです。

漢詩では、盛唐を代表する王維・李白・孟浩然・杜甫の近体詩を取りあげています。超俗の世界を詠む「竹里館」、月に後ろ髪を引かれつつ故郷からの旅立ちを詠む「峨眉山月の歌」、隠者の生活への憧れを詠む「洞庭に臨む」、自然の雄大さと自己の卑小を詠む「登高」と、それぞれ限られた字に凝縮された作者の思いを味わってください。いずれの詩にも高校生が経験したことのない世界が秘められています。

史伝では、日本で最も親しまれている『三国志』を取りあげています。「三顧の礼」は今でもよく使われる熟語です。劉備と孔明とはどのような出会いだったのでしょうか。時代背景と二人の心情の駆け引きを読み取って下さい。きっとこれ以降の二人の活躍が気になるはずです。学習後に生徒がさまざまな媒体で『三国志』の世界に飛び込むことを期待しています。

故事成語・思想・漢詩のコラムは、高校生にとって身近な話題で共感できる内容となっています。漢文に親しむための契機として利用して下さい。

『古典A』の漢文は、以上のような構成になっています。いずれも高校生にとって振り向きやすい作品です。日本で長い間親しまれた作品だけに、作品の内容を突きつめていくと、漢文独特のものの見方・考え方を味わうことができます。「温故知新」、教材から得た見方・考え方は、きっとこれからの生き方にも活かされるはずです。

(おおたとおる・愛媛大学)

特集 教材としての小林秀雄

何を読むか どう読むか

日常の水際で、小林秀雄を読む — 引用でつづる教材研究余話 —

岩崎昇一

だれもが、自分の望むところに生きるのではない。不如意な立ち位置で必死にいきている。そのやむに止まれぬ人心の動きや思いがその時代の相にいろいろりをあたえているのだ。美も文学もそこから鋭く磨かれて形を為す。それは、小林の論じる乱世であろうと高度なる情報化社会であろうと変わりはしない。むしろ現代の情報社会が私たちの情操を一層の混乱へと引き込んでいとも言えるだろう。混乱は生活の実感と情報との乖離から生まれる。立つべきところは、いまここに生きる生活と身体であるのに無用の解説や解釈がメディア空間を支配する。小さき者の迷い、焦慮、不安はここまで生きて来た実感に底知れぬ揺らぎをあたえる。

一方、手に負えぬメカニズムと情報に支配されたあたりを見渡せば（花も紅葉もなかりけり）、近代社会は私たちを日和見なる評論家に仕立て上げた。分かることを建前とする概説があふれ、したり顔の論者もてはやされる。巷間にはつきなみで類型的な言説が、日々人間の真相（深層）を貧しくさせている。そんな状況にあつて小林の言説が輝きを増す。

芸術も美も容易に分からぬものなのだ、と小林は言う。止むにやまれぬ人間の条件にむけて命の深層を歴史から、文芸から語り起こそうとする。しかし、私たちの日常は歴史からの語りを忘れている。死者の累積の中に歴史は幻影として存在

する、物言わぬ深層である。だから、それは思い出すことによつてしか現代にのみがえらない。思いではひととき満ち足りた時間をあたえてくれる。私たちの言葉（感性）が、そこからやつてきてやがてまた還る無私の領域である。思いでは私たちが選ぶのではない、思いでの側が私たちを選んでくれるのだ。空無な待機の時間に耐えて、美の萌芽ともいえる中世の時空に身を任せる。そこに作為が働く余地はない。そうして展かれた美と文学の時空がかけがえない生活を満たす、と小林は教えてくれる。

しかし、そんな詩的な時間はめつたにやつてこない。

私たちはどんな人災や天災に遭遇しようとも平常心をたもち、秩序や文化を探してはこころの繋がり、確かなものへの手ごたえを得ようとする。変わらぬ歴史に立ち返り、常なるものを見つけようと焦慮している。民衆の地産地消が循環してはじめて明日への構想が立ちあがる。荒地に芽を出した植物がやがて花をつけ、実を結ぶ。その時は、もうどんな過去の経緯も言葉（観念）も消えてしまうだろう。しかし、グローバル闘争社会は効率と時間に制約されて、人々はまるで人間

になりつつある一種の動物のようだ。昨日の悲惨を乗り越えてあらたな幻影の虜になる。不可避なものに立ち向かうまだらな死者の情念を打ちすえて、明日への臨界に混迷している。私たちは、歴史(自然)に立ち帰ろうとして実は拒絶されているのかも知れない。

そんな方途のない日常の水際に立ち、私たちは必死の思いで生きるとはなにかを問い続けている。自己の存在理由(あるいは正当性)について、それゆえの自己の生きる意味について……。他者への気遣いに疲労困憊しながら少なくともつらつとした感受性を保ち、この時代の孤独や不安に立ち向かおうと日々奮闘しているにちがいない。それ自体では接ぎ木に過ぎないと知りながら、メディアのことばや外来の思想がもてはやされるゆえんだ。それらは私たちのことばや考え方のみならず、感性(身体)までをも支配しているかにみえる。そんな時代にあつて……。

言葉は目の邪魔にさえなるのだ、と小林は論ず。

自然を前にして感動する身体のあるえ、その戦きこそが新しい解釈や方法から私たちを救ってくれるものだから、じつと

目を凝らして見つめほかはない。そこに見えた美を求めるところが他者を内側から理解する、愛するための道筋である。ただ目的もなく沈黙に耐えて名もなき小さな花を見つめること、その飽くなき繰り返し返しが知識や学問の遊戯を砕いてもその真の姿に至る、現代の乱世を生き抜く知恵である。だが、見ることに感ずることがそれほど確かなことであるのか。おのれの好みに開き直った直観や優劣を巧みに説き、自己の救済を遂げようとするなら、その修辞法はいずれ自壊へと向かう。言葉による検証と他者の言説に圧殺される、小さき者のつぶやきが静かに反撃を開始する。

小林の言説も、すでに生の現実に対するひとつの観念にすぎない。

どうも知識の遊戯に過ぎまいといい、言葉だけを辿って思わせぶりの文句だとか拙劣な作品だとか言っても意味がない。あるいは、史実ではあるまいと言ったところで面白くないことだと、工芸を論じる時でさえしばしば小林は理を超えて他説を非難する。だが、小林の修辞法もまた同じ批評の眼にさらされる。他説を斥けて、自説の神髄を披露する時逆説の修辞法があきらかにされる。ついにおのれ

の夢を語ることに過ぎないと、批評の命運を知悉する小林の面目躍如たるところである。むしろ、その魅力ある文体にこそ真意がやどっていると言えるだろう。常に接近する外来の思潮に翻弄されては、成熟を遂げてきたこの国の文芸の宿命を、近代という側面から生きた小林の文章は、今日の私たちにとつても、立ち返りつつ批判を受け、再び読まれては輝きをますものとして存在する。

その意味で、高校の現代文教材の漱石や鷗外の近代小説における役割りを文芸評論というジャンルにおいて果たしています。今後異文化や多言語との付き合いがますます深化するだろう。そんな時代にあつて私たちの歴史と文芸に出会う機会を、小林の評論文は与えてくれる。混迷の時代に高校の現代文の授業で出会い、小林の思想と修辞法を批判的に読解することは、ひとつのたしかな指針となり得ると考える。

注 本文は、小林秀雄の引用で成り立っている。三省堂 国語教科書教材テキスト「美を求める心」「無常とやうこと」と「罅」(平成二五年度センター試験問題文)からは特に多く引いている。

(いわさきしょういち・東京都立国際高等学校)

「姿」について 柳宣宏

小林秀雄は「西行」の中で、歌を引いて、次のように言う。

心なき身にもあはれは知られけり鳴立澤の秋の夕ぐれ
この有名な歌は、当時から評判だったらしく、俊成は「鳴立澤のといへる心、幽玄にすがた及びがたく」という判詞を遺している。歌のすがたというものに就いて思案を重ねた俊成の眼には、下二句の姿が鮮やかに映ったのは当然であらうが、どういう人間のどういう発想からこういう歌が生まれたかに注意すれば、この自ら鼓動している様な歌の心臓の在りかは、上三句にあるのが感じられるのであり、其処に作者の心の疼きが隠れている、という風に歌が見えて来るだろう。

「心なき」という言葉の解釈を巡って議論もあるようだが、道元禪師の歌などにも用いられており、出家者がこう言う時には、分別心がない、我が無い、といった意味である。あれが美しい、これが醜いといったとらわれのない身にも、あはれは感じられるというのである。鳴という鳥は黒っぽくて、本来夕暮れ時には映えないのだが、輝く落暉を背景に置けば、金屏風を背にした如く実に鮮やかに姿が浮かぶ。ここから芭蕉の「枯枝に鳥の止まりけり秋の暮」は、指呼の間にある。だから、鳴が飛び立つ音に感を発したというのは、肯えない。俊成が「幽玄にすがた及びがたく」と判じた姿は、このよう

な自我意識のない心から生まれたのである。

西行の歌にこだわったのは、「美を求める心」（三省堂『高等学校国語総合 現代文編』採録）を読み解くのに、「姿」という言葉が鍵だと思っからである。絵画や音楽を例にとつて、美は言葉や知識ではない、というのは納得しやすい。けれども、詩や歌が美しいのは言葉の意味ではなく姿なのだと言われて躓くのは、やむを得まい。赤人の歌が美しく感じられるのは、富士を見た時の赤人の感動が人の心を打つからだ。ただ、感動自体は叫びとなって現れたりするものの、すぐ消えてしまう不安定なもの。そんな不安定な感動を、言葉によって安定した姿にしたものが歌だと、小林は言う。いったい小林が「姿」という言葉を用いて、排除しなかったことは何だったのだろう。言葉の機能の一つである、意味の伝達によって美を表現できないということは、自身が語っている。だが、それだけか。歌という言葉の組織体が美しい「姿」になるのに欠かせないことは何だろう。言葉の意味は、人間の恣意的な分節化による。言葉を発するということは、自ずからあれとこれと、自と他とを分節化することに他ならない。しかし、美しい姿を前にした人間は、自もなく他もなく心を打たれる。そのような力を美は秘めている。つまり、自分の内に発した不安定な感動は、自分自身を消し去ってゆく過程のうちに、やがて自己を超えた感動の共同性へと至るのである。他者と競争に馴らされた現代人にとって、自分を消し去る行為は戦場から後退するようなものかもしれない。だから、美を求める心は育てようとしなければ衰弱するという小林の指摘は、蓋し名言だと思っ。 (やなぎのぶひろ・湘南白百合学園中学・高等学校)

小林秀雄教材の今日的意義

高野光男

二〇一三年度センター入試で小林秀雄の「罅^{つば}」が出題され、国語の平均点が大幅に下がったことが新聞紙面を賑わした。その一つに、漱石研究で知られ、『教養としての大学受験国語』などの著書もある石原千秋氏の「意義を欠いた好みの押しつけ」という見出しのついた文章（『産経新聞』二〇一三年二月一八日付）がある。石原氏は、「罅」における小林の主張には「いかなる根拠が示されるわけでもなく」、「根拠のない文章は好みの押しつけにすぎない」と批判し、大学入試問題には「高校までの学習が身につけているか」、「大学に入学してから研究ができる能力があるか」を確認する二つの意義があり、「いずれの観点からも失格である」と出題者を断じている。

石原氏の主張は、入試問題という観点からの正論だと思われる。だが、小林秀雄教材の価値・可能性について考えるとき、より重要なのは、石原氏が「高校国語の教科書の編集委員だったときにも、小林秀雄が山崎正和に、さらに中村雄二郎に取って代わるようになって、最後まで小林秀雄を採録することを主張したほどである。ただし、『かつてはこれが評論だった』という、文学史上の標本としてである」と述べている点であろう。「文学史上の標本」と石原氏は否定的なニュアンスを込めているが、私はこの「標本」を「古典」と読み替え、

そこに小林秀雄の国語教科書教材としての積極的な意義を見ている。

現行高校評論教材の主なものは言語論・身体論・メディア論など、言語論的転回以降の思想状況を基盤として成立したポストモダンの文章である。ポストモダンの限界が指摘され、ポスト・ポストモダンの模索が課題となっている現在、ポストモダンの発想をどう超えるかという観点から小林秀雄は読み直される価値があるし、少なくともポストモダンを知るためにはモダンの理解は欠かせない。

江藤淳は『作家は行動する』（一九五九年）で、芸術作品をはじめとする一切の文化活動を「物」と捉えた小林を、実体論として痛烈に批判したが、それは「ことばはもの、ではない。一種の記号である」（傍点は原文）という立場からであった。つまり、先駆的ポストモダンからのモダン批判といってよいのだが、知られるように、江藤は二年後の『小林秀雄』で評価を一変させなければならなかった。小林のいう「物」は「フォーム」「姿」「文体」「実感」「絶対言語」などと言い換えられている概念であり、「美を求める心」では「言葉を使って整えて、安定した動かぬ姿にした……」という文脈の中で登場している。この、言葉に対する「実感」は近年、茂木健一郎によって「クオリア」として再評価されている。単なるモダンへの回帰ではなく、新しい文芸批評の創造という小林秀雄の批評的営為のジャンル特性を捉えつつ、現代の思想・文化の相対化という真の意味での「古典」としての読み方が要請されているように思う。

（たかのみつお・東京都立産業技術専門学校）

センター試験「国語」の傾向と対策

安藤延明

第一問 評論

出典は齋藤希史の『漢文脈と近代日本』。中国古典文が士大夫階層のものであり、日本の漢文学習も士族階級のものであったこと、武士は行政能力としての文を積極的に身につけようとし、漢文が統治への意識を育んだことを述べている。

問1は例年通り漢字の問題。「棒」「占」「功」「易」「契」とやさしめであった。

問2は意味段落間の構成意図を読み取る問題。④段落の「ある特定の思考や感覚の型」という思わせぶりな表現は、後に種明かしされることが前提にある。その説明のために「広く考えて」みるのである。

問3は⑥～⑨段落の内容を問う問題。

中国での「展開」を問うているので、⑨

段落が最終段階となる。ちなみに、⑤のように順序を入れ替える選択肢は常套手段。時系列の逆転、原因と結果の逆転などのパターンがあり、足元をすくわれないうように注意する必要がある。

問4は⑫～⑰段落の内容を問う問題。

設問は、傍線部をきっかけとしてどう変化したかを問うている。評論でも小説でも、「あるものが、何をきっかけに、どう変化するか」は極めて重要である。その際には、「～となる」「～になる」という表現に注目するとよい。ここでは「自己確認もヨウイになる」がポイント。

問5は⑱～⑳段落の内容について、全文の内容をふまえて問う問題。③～④段落の「思考や感覚の型」について述べてきた文章であることを念頭におく。

問6の(i)は表現に関する問題、(ii)は構成に関する問題。これも例年通りであるが、毎年苦心されているようである。かといって新課程でも重視されている以上、なくすわけにもいくまい。

全体として見た場合、意味段落の内容を押さえた上で全体のまとめを問い、表現や構成の問題を付す、というスタイルが踏襲されている。漢文学習の意義というテーマからは、「古典に関する近代以降の文章」を盛り込むことを求めた新指導要領の影響を読み取ることも可能だが、そこにこだわるとテーマがある程度固定されてしまうので、来年度以降もこの傾向が続くかどうかはわからない。

第二問 小説

出典は岡本かの子の「快走」の全文。

女学校を出てから家事ばかりしていた道子が、銭湯へ行く時にこっそりランニングを楽しむようになる。時間のかかりようを不審に思った親は、道子宛の手紙をひそかに読んで事実を知る。様子を見に行こうと道子の後を追いかけた親たちも、久々に走る清々しさを覚えた。

問1は例年通り語句の意味を問う問題。「刻々に」「腰を折られて」「われ知らず」

と、やさしめである。文脈によらず選択肢だけで解いても正解できる。

問2は心情把握問題。心情を直接書くのは野暮なので、行動や表情を通して察することができるよう書くのが文学。「吐息をついて」という行動から読み取れる心情と、「吐息」をついた理由の組み合わせで判断する。

問3も心情把握問題であるが、「内面の動き」とあるように、心情の変化を問うている。問2で確認した心情が、走るというきっかけを通してどう変化したかを読み取る。小説問題の王道である。

問4は傍線を付さず、ある場面までの人間関係を問う問題。32～90行目（「道子はくしまった。」）が判断の根拠となるため、時間を要したのではないか。

問5も心情把握問題で、二か所の「笑い」に現れた心情の違いを読み取る。同じような行動でも、場面により心情は異なる。ここでは傍線部D「娘のことも忘れて」に注目する。「俺達は案外まだ若いんだね」という言葉が微妙に身に染み込んだ。無心に体を動かし汗を流す爽快感は、時代も年代も超える。

問6は例年通り表現に関する問題で、六つの選択肢から二つを選ぶ形式も同じ

であった。①は視点、②は伏線、③は同語の使い分け、④は比喩と色彩感、⑤は人物造形、⑥は焦点人物と人称の変化、⑦でも分類できようか。⑤は何かひねり出したという感のある選択肢。どのような表現がどのような効果につながるかについては、ある程度パターンをつかんでおく必要がある。表現は新課程でも重視されており、来年以降も出題が予想される。

語句、心情把握、表現という問題構成はオーソドックスなものであった。ただし、問4や問6のように広範囲を通じて吟味しなければならぬ設問があり、解答には時間を要したものと思われる。

第三問 古文

出典は『源氏物語』の「夕霧」。実直だった夕霧が落葉宮と関係を持ち、雲居雁が実家へ帰るといふ修羅場である。男女の愛憎には人間の普遍的な姿が現れるとはいえ、結婚に関する現代との習俗の違いは押さえておきたい。

問1は例年通り語句問題。「いかさまなり」「なめげさ」「らうたげなり」「聞こゆ」「いざ給へ」などがポイントで、難しくはない。(ア)④は「いかさま」

をインチキの意味でとらえて「だまして」と訳した選択肢。時折見られるこのような遊び(?)が受験生の心をなごませるか逆なでするかは定かでない。

問2も例年通り文法問題。「なめり」「驚かれ給うて」「のたまひはてば」「言ひ知らせ奉り給ふ」と、これも難しくはない。

問3は「上を恋ひ奉りて愁へ泣き給ふを」を踏まえて解く。その際、注8「上」が決め手となる。リード文と語注は必ず確認させるようにしたい。

問4は心情把握問題で、これも注12「中空」がポイント。落葉宮とも雲居雁とも険悪になり「もの懲りしぬべう」思う、根が真面目な夕霧。当時は恋愛に伴う期待や不安、嫉妬なども含めて楽しむのが「色好み」とされたのだが、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」という言葉には、「お前の親父や！」と突っ込みを入れた受験生も多かったろう。なお、④の「死にそうなほど」は「もの懲りしぬべう」を「死ぬ」とした選択肢。例によって例のごとし。

問5は難しい。Bの「見飽き給ひにける」「直る」の尊敬語の有無がポイントで、見飽きたのは相手、直るのは自分。敬語

による主語の判断は必須の力である。

問6は内容一致問題。③は「すぐさま」が不適當で、「奉れ給へど」「暮らしてみづから参り給へり」がその根拠となるが、これも難しい。例年のような表現問題ではなかったが、「あやふし」など文中の語句を引用しているところに、表現問題的にしようとする意図が感じられる。新課程でも表現を重視しており、表現問題が復活する可能性は高いと思われる。

和歌が出題されなかったのも今年度の特徴であるが、和歌は心情把握の面でも表現の面でも出題しやすいので、これも今後の復活が予想される。全体として主語の省略やなじみの薄い古語も多く、読み取りづらかったものと思われる。

第四問 漢文

出典は『陸文定公集』という明代の書である。江南では筍を食べるという話から始まって、美味なものは伐られるが不味なものは伐られずにすむと述べ、莊子の「無用の用」と同じだと結ばれる。

問1は例年通り語の意味を問う問題だが、どちらも送り仮名が省かれている。

(1)は「ならひとす」、(2)は「たつ

とぶ」と訓読する。

問2も例年通り返り点のつけ方と読み方を問う問題。「好事者」は物好きな者。「目」は評価する意で、筍好きな者は若く瑞々しい筍を評価して伸びた筍はとらないということ。「AスルニBヲモツテス」は頻出の句形で、そこに気づけば正解できるが、文意をとるのが難しい。

問3は対となる語の組み合わせを選ぶ問題。「甘」はうまい、「苦」はまずい。「取」は採取する、「棄」は放置する。対句表現はもちろん、対となる語に注意して読む習慣をつけたい。

問4は再読文字「猶」が理解できなければ難しくはない。ただ、問1と同じく送り仮名が省かれている。

問5は書き下し文の問題で、形式に違いはあるものの、問2と同じタイプの問題である。「莫不(ざるはなし)」の句形がわかれば絞り込める。また「取」「棄」に注目すれば、「貴」「賤」は「甘」「苦」の言い換えであることが分かる。語の対応関係を意識して読む習慣をつけたい。

問6は文章の構成を問う問題。表現や構成については新課程でも重要視されているので、今後も出題が予想される。まず具体的エピソードを述べ、最後に一般

化してまとめる、という構成は随筆の典型である。

問7は書き下し文と解釈を問う問題。「豈(耶)」だけを見て反語だと早とちりさせようという魂胆であろう。傍線部だけで判断すると間違えるという、最近の傾向にあてはまる。ただし、内容を理解していれば選択肢後半の主張の説明部分だけでも正解できるので、内容一致問題とも言える。

今回は、問2・問5・問7と、合わせて三題も書き下し文に関わる設問があった。また、問1や問4でも傍線部の送り仮名が省かれていた。全体として手掛かりが少なく、話題も受験生の日常的関心とは結びつきにくかったため、読み取りづらかったものと思われる。

今年度の平均点は98・67点で、史上初めて5割を切った。また13年ぶりに満点が出ず、最高点は195点であった。

昨年度の小林秀雄にせよ、今年度の古文漢文にせよ、確かに難しい。しかし、読解の基本が変わるわけではない。受験勉強を狭くとらえず、それまでの読書や思索の経験を豊かにすることが大切であろう。(あんどうのぶあき・高槻中学校・高等学校)

国語総合

高等学校国語総合 現代文編



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
248ページ

国総305

高等学校国語総合 古典編



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
184ページ

国総306

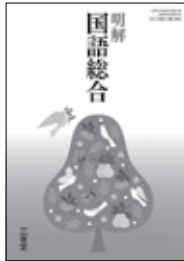
精選国語総合



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
400ページ

国総307

明解国語総合



編集代表＝
中冽正堯・
三浦和尚
A5判
344ページ

国総308

現代文B

高等学校現代文B



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
424ページ

現B303

精選現代文B



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
400ページ

現B304

明解現代文B

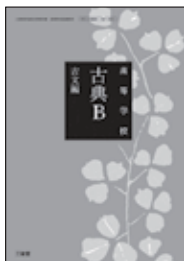


編集代表＝
中冽正堯・
三浦和尚
A5判
356ページ

現B305

古典B

高等学校古典B 古文編



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
252ページ

古B304

高等学校古典B 漢文編



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
176ページ

古B305

精選古典B



編集代表＝
中冽正堯・
岩崎昇一
A5判
372ページ

古B306

★三省堂国語教科書ホームページ「ことばと学びの宇宙」

<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>

※「三省堂国語教科書」で検索

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9556(営業)
☎03(3230)9411(編集)

●大阪支社 〒530-0002
●名古屋支社 〒460-0008
●九州支社 〒810-0012
●札幌営業所 〒060-0042

大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 ☎06(6341)2177
名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル4F ☎052(252)9211・9212
福岡市中央区白金 1-3-1 ☎092(531)1531・1532
札幌市中央区大通西15丁目 2-1 ラスコム15ビル3F ☎011(616)8722

『三省堂全訳読解古語辞典〔第四版〕』を引いて 和歌を作ってみよう!

昔から人々は、相手に伝えたい自分の気持ちや感動を、
さまざまな工夫を凝らして三十一文字で表現してきました。
あなたも古語辞典を片手に、和歌作りにチャレンジしてみませんか。

募集する部門

題詠部門：「待つ恋」

「待つ恋」をテーマに、五・七・五・七・七の形で和歌を作ってみましょう。
なるべく多くの古語を用いること。

歌枕部門

あなたの住んでいる地域・学校のある土地・生まれ故郷・旅先など、
身近な名所（古典和歌の歌枕だけに限りません）を詠み込んで、
五・七・五・七・七の形で和歌を作ってみましょう。
なるべく多くの古語を用いること。

応募方法

応募方法など詳細はホームページをご覧の上、応募用紙をダウンロードして下さい。
<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/topic/wakakon>

応募期間

2014年4月1日(火)～2014年12月22日(月)必着

賞品

- 優秀賞・・・各部門3名
(賞状・図書カード1万円贈呈)
- 入選・・・各部門5名(賞状贈呈)
- 団体賞・・・10校(賞状贈呈)



【応募先】

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
株式会社三省堂「三省堂 高校生創作和歌コンテスト」作品募集係
お問い合わせ：TEL 03-3230-9553(受付時間9:00～17:00 ※土・日・祝日を除く)

三省堂 高校生創作和歌コンテスト
作品募集!